

サクラで明るい春よ再び 石原義剛

さくらの季節です。さくらの名所はお花見で賑わっています。この冬は厳しい寒さがつづいたから、春から夏へ向かっての解放感が、お花見の賑わいをいや増しているように思える。

わたしの父親は、敗戦からの復興の希望を、伊勢志摩国立公園の指定に賭けて奔走した一人であるが、この国立公園は、伊勢神宮の広大な原生に近い森林と、その森林をぐるりと取り巻く海と、その美しい海から生まれる真珠を公園の宝ものとして成り立つと訴えた。

父親は昭和48年に95歳で長寿を全うして去ったが、晩年の15年間、さくらの苗木を公園内の公共的な場所に贈りつづけた。その数は8000本におよぶ。

生前よく「この地には花の木がない」。伊勢神宮に遠慮して、伊勢では庭に艶やかな花の樹木を植えないのだ、と言っていた。そして志摩の漁村では、永い間、暮らしに追われて花を愛でる気持ちを持てないできたと言っていた。だから、学校や漁港周辺や公民館や公園に、毎年、さくらの苗木を植えて、この地方に明るい春を迎えたかったのであろう。

そのさくらが近年、春を彩らなくなった。学校や漁協の統廃合により施設の新築や移転で邪魔になったさくらは伐られた。公園ではさくら守りのお年寄りが亡くなった。毎年さくらの下でお花見の酒宴を開いた村人が集まらなくなった。

去る三月末、そのことを知った志摩市の青年会議所の若者たちが、かつて真珠で栄えた間崎島にさくらの苗木を植えた。もう一度この地にさくらの明るさで、希望を取り戻そうと誓ったのだ。